

【追記】

■ 4/14(金)・16(日)音楽発表会当日

学校の音楽発表会と侮るなかれ。14日は4回公演。16日も2回公演の計6回公演するタフさ。伝統楽器による合奏あり、モンゴル舞踊あり、ソロでの歌あり、ヒップホップ系のダンスあり、中高生約300人による盛りだくさんな発表会で全31プログラム中、よさこいは28番目とかなり良い位置に構えてくれた。



もうすぐ出番！



出番前の舞台上で集合写真。4回目の出番にも関わらず、ステキな笑顔☆

さすがに1日4回もやると徐々に疲れを見せていた生徒たちだったが、最後の最後まで舞台上ではステキな笑顔で踊りきった。



本番！



最後のキメポーズ。

本番でも、中腰や腕を伸ばすことはできなかったが、最後のキメポーズは 6 回とも全員がきっちり揃えられていた。

観客の反応も上々で、約半年間この 20 人と練習してきて良かったと思える舞台となった。

■今後

音楽発表会終了直後は、他で披露する予定がなかったが、6 月 3 日に行ったゴビ・アルタイ全県の音楽教員を対象にしたリコーダー・セミナーの開会式と 6 月 5 日の修了式中で披露することが急遽決まり、生徒たちは「覚えていない。」と言いながらも、しっかりと踊りきった。

しかし、6 月から夏休みに入ってしまった、今後どのような形でよさこいを続けていくかは 9 月(新年度)以降の課題となっている。ただ、鳴子に関しては、工業科の先生方が制作可能だと言ってくれたので、9 月以降数を増やしていけるかもしれない。

私の任期が 1 月までしかないことを考慮に入れつつ、来年度もせめて音楽発表会では舞いを披露できるよう画策していきたい。

■その他

約半年間、実際によさこい踊りを教えてみて、生活する以上に『異文化』を意識させられた。よさこいの説明にしても、実際に動きながらの指導にしても、生徒たちのバックグラウンドを習慣や文化レベルで正しく認識し、考慮した上で指導することの必要性を強く感じた。

同じアジア圏ですら習う側と教える側、お互いに戸惑いがあったので、アジア圏以外だ

とより難易度が高く、相手国の文化や風習に対してより考慮が必要だと思う。

また、発展途上国だと日々の生活の中で人々が触れる情報量がとても少ないので、習う側の「外国の踊り」という認識も私たちのそれとは違い、意識の根底には必ず国民性や個性がある。

モンゴル国民は愛国心や郷土愛がとても強く、「モンゴルが、自分の生まれ育った地が最高だ」と信じて疑わない傾向がある。外国(外国人)から何かを学ぶ際も、モンゴルの美的感覚や常識にそぐわないと聞き入れること自体が難しくなる。

外部からの情報が少ないことから、(先進国に比べると)視野が狭くなりがちの人々に何かを教え、伝えることは大変難しい。しかし一方で、自分たちの常識と異なることを紹介されて戸惑う相手のことを、教える側は十分に考えなければならないと思う。

最後になりましたが、青年海外協力隊に応募し、高知県庁おもてなし課の皆様や JICA のご協力を賜れたことで、このような貴重な経験を積むことができました。異国の地で教えたからこそ郷土の文化に真摯に向き合え、その結果見えたもの、感じたことは私の大きな財産となります。

本当にありがとうございました。